

第17集

令和3年3月

山形県教育庁義務教育課

はじめに

本県では、平成14年度から“教育山形「さんさん」プラン”の推進により、「少人数学級編制」を基盤とした教育環境の整備を段階的にすすめ、平成23年度に小中学校のすべての学年において全面実施されました。平成25年度には、特別支援学級における学級編制基準の引き下げの実施、平成28年度には、教員のさらなる指導力の向上を図るために「教育マイスター制度」を立ち上げました。

このような、学級規模を生かした学級経営による安定した教育環境のもと、きめ細かな指導の充実により個の能力を最大限に伸ばし、「わかる授業」と「いじめや不登校のない楽しい学校」の実現に向け取り組んできました。

この「さんさんガイド」第17集には、「少人数学級編制」「特別支援学級の編制基準引き下げ」「小学校低学年副担任制」「教育マイスター制度」「小学校低学年副担任制」の各制度における今年度の優れた実践が収められています。どの実践からも、探究型学習による確かな学力の育成に向けた授業改善や、一人ひとりの実態に応じた指導の充実に向けて、学校組織として計画的に取り組んでくださっていることがうかがえます。また、各教育事務所における各地区の実態に応じた授業改善の視点についても掲載しておりますので、各学校においては学習活動をより充実させるための参考にしていただきたいと思います。

最後になりましたが、第17集の作成にあたり、多くの市町村教育委員会と小中学校等の御協力により、すばらしい教育実践の成果をまとめていただきましたことに感謝申し上げます。

令和3年3月

山形県教育庁義務教育課

課長 小関 広明

目次

はじめに

I 少人数学級編制等推進事業について

- ・令和2年度“教育山形「さんさん」プラン”基本方針と施策内容..... 2
- ・令和2年度「教育マイスター制度」の概要、マイスター育成研修..... 3
- ・子ども同士が精一杯考え合い表現し合う授業をめざして..... 4
- ・令和2年度“教育山形「さんさん」プラン”に係る学校訪問..... 6

II “教育山形「さんさん」プラン”の各施策について

1 各学校の実践事例

■少人数学級編制

- 個に応じたきめ細かな対応による児童の学びと心の充実【三川町立横山小学校】..... 8
- 40人学級で目指す「探究的な学び」【舟形町立舟形中学校】..... 10

■特別支援学級基準引き下げ

- 生活に使える力の定着をめざした教科指導の充実【山形市立第三小学校】..... 12

■小学校低学年副担任制

- 一人ひとりに対応し、個の力を伸ばす指導の在り方【庄内町立余目第二小学校】..... 14

■教育マイスター制度

小学校：教育マイスター（OJT支援員配置）

- 校内研究の推進に向けて連携する教師集団の育成をめざして【鮭川村立鮭川小学校】.... 16
- 教師の「授業力の向上」をめざして【飯豊町立第一小学校】..... 18

中学校：教育マイスター

- 探究型学習等を通じた共に学び合い共に高め合う生徒の育成【村山市立葉山中学校】.... 20
- 数学を重視した学力向上のための授業改善の取組み【南陽市立沖郷中学校】..... 22

2 “教育山形「さんさん」プラン”を生かした授業改善のポイント

- 村山教育事務所..... 24
- 最上教育事務所..... 26
- 置賜教育事務所..... 28
- 庄内教育事務所..... 30

I 少人数学級編制等推進事業について

1. 基本方針

- ①少人数学級編制【小学校1年生～中学校3年生】
 - ※ 小学校1年生、国による35人以下学級の実施
 - ※ 小学校2年生、定数加配を活用した35人以下学級の実施
- ②特別支援学級 学級編制基準の引き下げ【8人→6人】
- ③重要施策の継続実施 ア 小学校低学年副担任制 イ 別室学習指導教員(中)
- ④中学校指導方法工夫改善の実施
- ⑤教育マスター制度 教育マスター(小)(中:指導方法工夫改善の活用)

2. 施策内容

小		学				校		
小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
国: 35人以下学級		国: 40人以下学級						
①少人数学級編制 (1.8人～3.3人)	①少人数学級編制 (1.8人～3.3人) ※学年の人数が36～40人の場合は、2学級に分け、国加配による常勤講師を配置		①少人数学級編制 (2.1人～3.3人) ※学年の人数が34人～40人の場合は2学級に1人の割合で非常勤講師を配置 ただし、中学校1年生は1学級に1人の非常勤講師を配置					
②特別支援学級 学級編制基準の引き下げ (8人→6人) ※学級の人数が7～8人の場合は、2学級に分け、増加学級分に常勤講師を配置								
③ア: 小学校低学年副担任制 【小1プロブレム対策】 ※学年の人数が34人・35人の場合は、副担任として、非常勤講師を配置						③イ: 別室学習指導教員 【別室登校・不登校対策】 ※別室登校生徒の支援のため非常勤講師を配置		
⑤教育マスター 【「探究型学習」等による授業改善及びOJTの充実による学力向上対策】 ※「教育マスター」の業務を支援する非常勤講師(OJT支援員)を配置 ※R2学力向上計画の内容を精査し配置校を決定。2年間継続。 ※ICT教育推進拠点校(4校)においては教育マスターを任命し、非常勤講師を優先的に配置						④指導方法工夫改善 【学力向上対策等】 ※指導方法工夫改善のための常勤講師等を配置		
						⑤教育マスター 【「探究型学習」等による 授業改善の充実による学力向上対策】 ※中堅教員が継続的・実践的に研修 ※「指導方法工夫改善」加配の担任外配置2人以上の学校、 国の「課題解決型授業に係る教育指導改善研究」加配の配置校において、加配のうち1人を充てる。		

令和2年度「教育マスター制度」の概要

目標

「探究型学習」等による授業改善を推進し、
教員の資質・能力の向上及び児童生徒の確かな学力の育成を図る

- 各学校において「探究型学習」等による授業改善を推進するための校内OJTにより、主として増加する若手教員の授業力を向上させ、次代のリーダーとなる人材を育成する。
- 教育マスターは授業改善を推進することにより、児童生徒に確かな学力を育成する。
 - ・全国学力・学習状況調査やアクションプラン、山形県学力等調査、県作成の評価資料を活用して授業改善に取り組む。
 - ・ICT教育推進拠点校では、ICTを効果的に活用しながら授業改善に取り組む。

マスター制度の○成果・☆今後に向けて

- 小学校のマスター配置校で学力の「伸び」が大きい。
- 小学校のマスター配置校で主体的・協働的な学びが推進されている。
- マスターの配置により、校内研修のコーディネートが図られ、校内研修会の取組みの充実・改善が進んだ。
- ☆大量退職が続いており、新規採用教員や若手教員が増加している。そのため、これらの教員を主として指導力の向上を図る必要がある。
- ☆特に中学校においてより効果的にマスターを活用できるよう、研修を充実させる必要がある。

	制度	求められる人材	役割・勤務等	配置校等
小学校	<ul style="list-style-type: none"> ■ 校内の優れた教員を「教育マスター」として育成し、活用 ■ 「教育マスター」の業務を補助するOJT支援員(非常勤)を配置(マスターの校内授業参観、校外研修参加やその他の教員の校内授業研参加の後補充等を担う) ・「マスター育成研修(別紙)」に基づき、「探究型学習」等による授業改善を推進できる力を持ったマスターを育成 ・マスターのコーディネートによる、組織的・日常的・実践的なOJTの充実 <p>※ICT教育推進拠点校(小学校4校)に優先配置</p>	<ol style="list-style-type: none"> ① 年齢 <ul style="list-style-type: none"> ・概ね長期研修・中央研修派遣者と同年代 ② 資質・能力 <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導や学級経営に優れた実績がある者 ・人間力があり、周囲の信頼が厚い者 ・協働的で、組織をマネジメントでき、授業改善の推進リーダーになることができる者 ・「教育マスター」事業を理解し熱意をもって取り組む者 ※校務分掌に明示する。なお、業務を積極的に推進できるよう、校務分掌を軽減する。 	<ol style="list-style-type: none"> ① 学力向上に向けた授業改善を推進する <ul style="list-style-type: none"> ・自分の学級でのモデル授業を提案する ・授業を参観して指導・助言する ② 授業改善に関するOJTのコーディネートを行う <ul style="list-style-type: none"> ・研修課題を設定する ・研修会を効果的に運営する ・最新の情報を収集・提供する ③ 「マスター育成研修」に参加する ④ OJT支援員の勤務条件 <ul style="list-style-type: none"> ・週30時間 1日6時間(例) 8:30am～(授業参観の後補充等) ⑤ 報酬 <ul style="list-style-type: none"> ・1時間当たり1,500円 	<ol style="list-style-type: none"> ①「学力向上計画書」の提出を受け、義教課において内容を精査し、配置校を決定する。 ②ICT教育推進拠点校に優先配置する。「学力向上計画書」の提出を求める。 ・全国学調を成果指標として設定する。 ・全国学力・学習状況調査問題や評価問題、アクションプランを活用した授業改善について計画書、報告書に明記する。
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ■ 次代のリーダーとして期待される中堅教員を継続的・実践的な研修により「教育マスター」として育成し、活用 ・「マスター育成研修(別紙)」に基づき、「探究型学習」等による授業改善を推進できる力を持ったマスターを育成 ・各校で育成を目指す資質・能力を明確にした、「探究型学習」等による授業改善・OJTの充実 ・学区の小学校を訪問し、小中の学力向上の連携を核とした協働的な授業づくり ・小中の学力向上の連携を核とした授業づくりのための、学区の小学校訪問 	<ol style="list-style-type: none"> ① 年齢 <ul style="list-style-type: none"> ・概ね長期研修・中央研修派遣者と同年代 ② 資質・能力 <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導や学級経営に優れた実績がある者 ・人間力があり、周囲の信頼が厚い者 ・協働的で、組織をマネジメントでき、OJTの推進リーダーになることができる者 ・「教育マスター」事業を理解し熱意をもって取り組む者 ③ 任命 <ul style="list-style-type: none"> ・当該校の教諭の中から、原則として、校長の意見を聞いて、所管する市町村教育委員会が命じる。 ・校務分掌に明示する。なお、業務を積極的に推進できるよう、校務分掌を軽減する。 	<ol style="list-style-type: none"> ① 学力向上に向けた授業改善を支援する <ul style="list-style-type: none"> ・授業を提案する ・授業を参観して指導・助言する ② 授業改善に関するOJTのコーディネートを行う <ul style="list-style-type: none"> ・研修会を効果的に運営する ・最新の情報を収集・提供する ③ 学区の小学校を訪問し、協働的に授業づくりを行う ④ 「マスター育成研修」に参加する 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導方法工夫改善加配による担当が2名以上の学校 ・国の「課題解決型授業に係る教育指導改善研究」加配の学校 <p>(本事業の趣旨を理解し、加配を効果的に活用し、OJT及び学区の小学校の研修を高めることへの理解)</p>

令和2年度「教育マスター育成研修」

研修の目的:「探究型学習」等による授業改善において指導的な役割を担う教員の育成により、県内全体の教員の資質向上を図る。

教育マスター

全国学力・学習状況調査やアクションプラン、山形県学力等調査、県作成の評価資料等を活用して

ICT教育推進拠点校

ICTを効果的に活用して

「探究型学習」等による授業改善を推進する、次代のリーダーとして期待される教員

	4月	9月	3月
ベーシック研修 業務や研修について理解する ① 「教育マスター」の業務である、「探究型学習」等による授業改善と、育成研修について理解する。 ② 実践をもとにした授業改善について協議・交流する。また、講師から指導・助言を受ける。 ③ 1年間の研修成果をまとめ、次年度に生かせるようにする。	ベーシック研修① ・ 1日(4月20日) ・ 県教育センター ・ 事業説明・各教育事務所体制づくり ・ 研修(探究型学習等)	ベーシック研修② ・ 1日(8月27日) ・ 県教育センター ・ 実践事例紹介・協議 ・ 講師による指導・助言 等	ベーシック研修③ ・ 1日又は半日 (2月下旬) ・ 各教育事務所 ・ 研修の実績報告
グループ研修(県内・県外) 優れた実践について、共に研修する 県内 各教育事務所単位でグループを編成※し、グループ内のマスター所属校を訪問し、「探究型学習」等による授業改善やOJTの進め方等について研修し、グループで協議する。 県外 優れた実践を蓄積している学校(県外)を、各教育事務所単位のグループで訪問し、「主体的・対話的で深い学び」を通じた優れた授業改善について研修し、グループで協議する。	グループ研修(県内) ・ 原則として、グループ内のマスター所属校で行われる授業研究会等に参加 ・ 各教育事務所単位のグループ ※ICT教育推進拠点校の教育マスターは、他の教育マスターとは別にグループを編成する(村山・置賜グループ、庄内・最上グループ)。 ・ グループで協議し、研修先を決定 ・ 申し込み等の準備はグループで実施 ※研修内容を年度内に各校に還元できるように、時期に配慮する	グループ研修(県外) ・ 各教育事務所単位のグループ ※ICT教育推進拠点校の教育マスターは、他の教育マスターとは別にグループを編成する(小学校グループ、中学校グループ)。 ・ 各教育事務所がマスターと協議・調整・指導 ・ 決定後は、グループ代表が視察先担当者と連絡を取り合い、グループで準備 ※研修の充実、学校への還元等を鑑み、時期や距離等に配慮する	
グループ研修(教育事務所単位の研修) 「探究型学習」等による授業改善・OJTについて研修する ・ 「探究型学習」等による授業改善・OJTの組織的な取組みを共有し、自校の取組みに反映させるなどして、PDCAサイクルを機能させ、授業の質的向上を図る。 校内研修の運営・推進 自校における組織的な授業改善を推進する ・ 自校の教諭の資質・能力を高める研修のあり方について研修する。	グループ研修(教育事務所単位の研修) 「探究型学習」等による授業改善・OJTの推進方策の共有	校内研修の運営・推進 ・ 1~2回 ・ 校内研修のコーディネーター、指導・助言 ・ 他学級の授業参観 ・ 自身の授業公開 ・ 校外研修で収集した最新・優良な情報の還元	
他校への出前指導 育成を目指す資質・能力を共有し、小学校との連携を図る ・ 域内の小学校における授業研究会等に参加し、育成を目指す資質・能力の視点から、授業づくりについて協働的に検討する。 ・ 系統性や指導方法についての共通理解を図る。	他校(域内の小学校等)への出前指導 中学校マスターのみ ・ 域内各小学校へ1~2回 ※学校や学区の実態に応じ、回数を調整する。 ・ 域内小学校における授業研究会の事前・事後検討会等に参加 ・ 学校間で日程等を調整、所属長の出張命令により訪問 ・ 旅費は、各教育事務所あてに充当替え申請を行う。 ・ 小中学校を通して育成を目指す資質・能力について研修	研修総日数 20日程度	

教育マスター グループ研修(県内・県外)一覧

【小学校】

グループ	マスター配置校	県内グループ研修先	県外グループ
村山A	山形市立第二小学校	山形市立第七小学校 山形市立鈴川小学校	〇
	山形市立第五小学校		
	山形市立第六小学校		
	山形市立第七小学校		
	山形市立鈴川小学校		
	山形市立千歳小学校		
村山B	上山市立西郷第一小学校	天童市立天童南部小学校 天童市立寺津小学校	〇
	天童市立天童南部小学校		
	天童市立長岡小学校		
	寒河江市立寒河江小学校		
	寒河江市立寒河江中部小学校		
村山C	村山市立榑岡小学校	東根市立長瀬小学校 村山市立榑岡小学校 尾花沢市立尾花沢小学校	〇
	東根市立長瀬小学校		
	東根市立神町小学校		
	尾花沢市立尾花沢小学校		
村山	天童市立寺津小学校 (ICT)	小国町立小国小学校	〇
最上A	新庄市立新庄小学校	新庄市立新庄小学校 鮎川村立鮎川小学校	〇
	新庄市立日新小学校		
	最上町立向町小学校		
	鮎川村立鮎川小学校		
最上	戸沢村立戸沢小学校 (ICT)	戸沢村立戸沢小・中学校	〇

【中学校】

地区	マスター配置校	県内グループ研修先	県外グループ
村山D	山形市立高橋中学校	中山町立中山中学校 山形市立蔵王第一中学校	〇
	山形市立蔵王第一中学校		
	天童市立第二中学校		
	中山町立中山中学校		
村山E	朝日町立朝日中学校	東根市立神町中学校 大江町立大江中学校	〇
	寒河江市立陵西中学校		
	大江町立大江中学校		
	村山市立葉山中学校		
	東根市立神町中学校		
最上B	大石町立大石田中学校	真室川町立真室川中学校 金山町立金山中学校	〇
	金山町立金山中学校		
	真室川町立真室川中学校		

置賜A	置賜B	置賜C	置賜
米沢市立東部小学校 南陽市立赤湯小学校 川西町立小松小学校	川西町立小松小学校 南陽市立赤湯小学校	米沢市立南部小学校 高島町立高島小学校 白鷹町立荒砥小学校	小国町立小国小学校
米沢市立松川小学校 高島町立糠野目小学校 飯豊町立第一小学校	白鷹町立荒砥小学校 高島町立高島小学校 飯豊町立第一小学校 高島町立糠野目小学校	飯豊町立第一小学校 高島町立糠野目小学校	小国町立小国小学校
小国町立小国小学校 (ICT)	小国町立小国小学校	小国町立小国小学校	小国町立小国小学校

庄内A	庄内B	庄内
鶴岡市立朝陽第一小学校 鶴岡市立朝陽第二小学校 鶴岡市立朝陽第三小学校 鶴岡市立朝陽第四小学校 庄内町立立川小学校 酒田市立亀ヶ崎小学校 酒田市立泉小学校 酒田市立十坂小学校 酒田市立岩野浦小学校	〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇	〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
遊佐町立吹浦小学校 (ICT)	戸沢村立戸沢小・中学校	〇

置賜D	庄内B
南陽市立沖郷中学校 川西町立川西中学校 小国町立小国中学校 飯豊町立飯豊中学校	南陽市立沖郷中学校 川西町立川西中学校
鶴岡市立榑引中学校 鶴岡市立温海中学校 酒田市立第六中学校	鶴岡市立榑引中学校 酒田市立第六中学校 鶴岡市立温海中学校 酒田市立泉小(講演会)

※令和2年度は、新型コロナウイルス感染症対策により県外におけるグループ研修は中止



子ども同士が精一杯考え合い

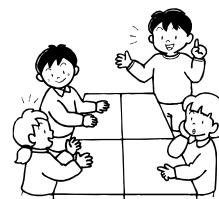
個の能力を最大限に伸ばす

- ～ 学習意欲を喚起し、考えや解決の見通しをもたせる「課題提示」 ～
 - 日常場面や生活との関連を図った魅力的な教材や高みの問題を提示し、一人ひとりが主体的に学習に取り組むことができるように工夫する。
 - 「問題を自力で解く・他者とかかわりながら解く」「教材文を読み、考えを書く」「事象・現象・情報を分析する」「観察・実験を行い、考察する」「体験する」等を効果的に取り入れ、一人ひとりが自分の考えや解決の見通しをもつことができるようにする。
- ～ 互いの考えが認められ、目的に応じて練り上げられる「学び合い」 ～
 - 互いの考えを出し合わせ、友達の考えとの共通点や相違点をもとに話し合わせたり、誤答を生かした学習活動を取り入れたりとすることで、児童生徒が自分の考えを広げたり深めたりできるようにする。
 - ねらいに応じて、記録、要約、批評、説明、論述等の言語活動を取り入れ、児童生徒の学び合いが深まるようにする。
- ～ 子どもの考えを生かした「納得感のあるまとめ・振り返り・練習」 ～
 - 本時のねらいに対応した自分なりの「まとめ」、できるようになったことやよくわからないこと、今後さらに学んでいきたいこと等を確認する「振り返り」、より深い理解に向かう効果的な「練習（問題）」を通して、学習内容を確実に定着できるようにする。
 - 自分の見方や考え方の変容を認識し、次の授業や家庭学習への意欲を喚起できるようにする。

学級規模を生かす

- ～ 少人数学級（33人以下）の特性を生かした授業 ～
 - 教員が一人ひとりと丁寧に向き合える環境を生かして、児童生徒のニーズを的確にとらえるとともに、ユニバーサルデザインの視点を取り入れることで、必要なときに、適切な内容で的確に支援できるようにする。
 - 小集団に分かれての学習では、それぞれの様子が把握しやすいことや的確に助言できることを生かし、児童生徒が主体的・協働的に課題を解決する探究型学習を充実する。
- ～ 複式学級の特性を生かした授業 ～
 - 直接指導・間接指導の特性や連続性に配慮し、目的意識や見通しをもたせ、児童生徒が主体的・協働的に課題を解決できるようにする。
 - 異学年間の伝え合いや学び合い、発表の場を学習計画に取り入れ、かかわりの中で互いを高め合うことができるようにする。

表現し合う授業をめざして



～ 多人数学級における協働的な指導の工夫 ～

- コース別学習やチーム・ティーチング等の指導の工夫ができるように教員の協力体制を機能させ、個に応じた指導の充実を図る。

変化する時代を生きぬく力を育む

～ 人間関係を豊かにする自己表現力やコミュニケーション能力の育成 ～

- 対話を取り入れた様々な形態の学習活動を通して、児童生徒が他者の考えを受け入れながら自らの考えを広げたり深めたりできるようにする。
- 児童生徒が異なる文化や生活習慣、障がいの有無等の違いを認め合い、協調しながら、互いに支え合い、高め合う関係づくりができるようにする。

～ 一人ひとりの勤労観・職業観を育むキャリア教育の充実 ～

- 発達段階に応じて職業人、社会人、文化人等の生き方に触れ、児童生徒一人ひとりが自らの在り方や生き方に向き合うことができる学習を充実させる。
- 職場体験やインターンシップなどの体験的学習の教育的価値を一層高めるよう実施方法、内容を工夫する。

～ 数学的な見方で考えることよさを実感できる算数・数学の授業 ～

- 充実した数学的活動を通して、児童生徒が学んだことを生活や他の学習に活用し、学ぶ意欲を高めるとともに、数学的な見方で考えることよさを実感できるようにする。

～ 科学への関心を高め、科学的な見方・考え方を働かせて課題を解決する理科の授業 ～

- 身近な生活との関連から学習内容を充実させ、児童生徒一人ひとりが目的をもって観察・実験等を行うことにより、科学への関心を高めるとともに科学的な見方・考え方を働かせて課題を解決する力を育む。

～ 小中高の接続を意識した外国語教育の展開 ～

- 各学校段階における目標や基本的な考え方を十分理解し、小中高の接続や学習経験を踏まえた外国語教育の充実を図る。
- 特に、中学校においては、小学校で培われたコミュニケーション能力の素地を十分に踏まえた指導を工夫する。

～ ICTを活用した学習の充実 ～

- ICTを活用して課題を発見し解決することを通して、自己の考えを深めたり新しい価値を生み出したりする力を育成する。
- ICTを活用した学習を通して、情報や情報技術を適切かつ効果的に活用して、情報社会に主体的に参画しようとする態度を育成する。

少人数学級編制等推進事業

令和2年度“教育山形「さんさん」プラン”学校訪問

1 目的

“教育山形「さんさん」プラン”推進に関して、県教育委員会の事業担当者が県内の該当校を訪問し、事業の取組状況を把握するとともに、学校が抱える課題や要望等を明らかにして、今後の事業推進に反映させる。

2 対象校

- (1) 「少人数学級編制」に該当している小学校（地区1校）
- (2) 「少人数学級編制」に該当している中学校（地区1校）

3 訪問期間 6月～12月

（教育事務所管内毎に、期間内に訪問日を調整）

令和2年度 訪問校一覧

校種	小学校	中学校
区分	少人数学級編制	少人数学級編制
村山	山形市立西小学校	天童市立第一中学校
	7月22日（水）	
	9：30～11：30	13：30～15：30
最上	大蔵村立大蔵小学校	新庄市立萩野学園（後期）
	10月7日（水）	
	9：30～12：00	13：30～16：00
置賜	長井市立平野小学校	米沢市立第六中学校
	10月13日（火）	
	9：20～11：30	13：20～15：30
庄内	鶴岡市立櫛引西小学校	鶴岡市立鶴岡第五中学校
	11月13日（金）	
	9：30～12：00	13：30～16：00

Ⅱ “教育山形「さんさん」プラン”の各施策について

**少人数学級編制
個に応じたきめ細かな対応による児童の学びと心の充実
三川町立横山小学校**

1 本校の実態

全校児童 160 名、普通学級が 6 学級、特別支援学級が 4 学級、計 10 学級である。そのうち現 4 学年は 36 名で、小学 1 年時は国の基準により 2 学級、2 年時はさんさんプランによる加配で 2 学級、令和元年度の 3 年時から 37 名の 1 学級になったが、県の加配により少人数指導教員（非常勤講師）1 名が配属された。

学級の中には特別な支援を要する児童が複数名いることや学習指導や生徒指導で指導を要する児童も多いこと、また、転出入や転籍などもあり、低学年の頃から安定しない面も多かった。

2 実践

(1) 運用の方針

令和元年度は第 3 学年の学級に、令和 2 年度は第 4 学年の学級に少人数指導教員を配置し、以下 3 点に力を入れた。

- ① 学習指導では、学習規律と学力向上をめざし、T T 指導による個に応じた指導や支援を行うこと
- ② 生徒指導では、特別な支援を要する児童への支援や児童の心に寄り添ったきめ細かな対応による個の安定と集団の意欲高揚を図ること
- ③ 担任が児童と向き合う時間を確保するために担任の事務的負担を軽減すること

(2) 具体的な取組み事例

- ① 宿題点検による、確実な提出とコメントによる学習意欲の向上

学級の人数が多いが、細部まで宿題を点検することで、全員が確実に提出するようになり、一つ一つ丁寧に宿題に取り組む習慣が形成された。また、毎日、全員の自主勉強ノートに励ましのコメントやアドバイスを書き、子どもの学習意欲と学力の向上にもつながっていた。

- ② 低位の児童への支援

授業では特に低位の児童を担当し、指導している。児童に寄り添いながら指導していることで、自信を持って挙手をしたり、みんなの前で発表したりするようになり、少しずつ学力の向上も見られるようになってきた。

- ③ 特別な配慮を要する児童への対応

学級全体で一緒に行動できなくなった時に、その児童と一緒に過ごしたり、別室で指導をしたりすることが可能になるので、他の児童の活動に影響を及ぼすことなく、個別の対応をすることができた。（令和元年度）

- ④ 教室環境の充実

いつも同じ少人数指導教員が教室にいるため、教科担当の授業で担当教員が

変わっても、児童が安心して授業に臨むことができた。休み時間も、担任か少人数指導教員のどちらかが教室にいることができるため、児童の安心・安全につながった。その他、学習・生活上のいろいろなところで担任と情報を共有しながら児童を支えていたので、児童全員がとても安心・安全に過ごすことができた。

⑤ 担任が児童と向き合う時間の確保

- ・宿題点検や宿題印刷、アンケート結果集計等の事務的な処理を少人数学級指導教員に業務を分担したので、在校中に担任が児童と向き合う時間も増えた。連携・協働して児童と関わる時間の充実につながった。
- ・コロナウイルス感染予防対策のための消毒作業を行った。消毒作業を任せることができ、担任は児童の給食指導に向かうことができた。放課後に時間があるときは、消毒作業も行った。(令和2年度)

3 成果と課題

- ・児童が2年生から3年生になるとき、2学級から1学級になり、人数が倍に増えたが、担任はもちろん少人数指導教員を配置したことで、児童が安心してコミュニケーションを図ることができる環境ができた。



- ・学力においては、初見の文章を読む活動を取り入れるとともに、協働的な学習をたくさん行った。その中で子ども同士が関わる際、担任と少人数指導教員が連携して適切な支援を入れることができ、学力向上につながった。その結果として、国語のNRTやCRTの偏差値が高くなった。
- ・算数においては、低位の児童が安心してともに学ぶ姿がつけられている。Q-Uの結果では学校生活意欲総合点の分布を見ても学習関係で全国平均より1.5ポイント以上高い結果となっていた。
- ・生徒指導においては、個々の児童が、学級の中に自分の居場所があり、絆づくりができた。仲よしになるためのアンケート(いじめ)の調査では、年間23件(2年時)、11件(3年時)、8件(4年時)に減少している。また、Q-Uの結果では、学級満足度尺度では、3年時の5月の結果では学級生活不満足群に4名、侵害行為認知群1名、非承認群に6名と分布していたが、4年時の10月の結果では学級生活不満足群に0名、侵害行為認知群0名、非承認群に3名となり、ほとんどが学級生活満足群に属している。また、学校生活意欲総合点の分布を見ても、友だち関係で全国平均より1.5ポイント以上高い結果となっている。

上記の点から見ても、少人数指導教員の配置は、学校の教育力をパワーアップさせるために大変ありがたく、有効な加配といえる。今年度、学びが主体的・協働的にできたこと、学級集団で自己有用感が育成されたことは、認め合い高め合う学校づくりにつながったと考える。是非、来年度以降も継続して配置していただきたい。

少人数学級編制
40人学級で目指す「探究的な学び」
舟形町立舟形中学校

1 本校の実態

本校は、今年度は、全校生徒 130 名、学級数 6 学級（うち 2 学級は特別支援）、1 学年及び 2 学年が 40 人学級となった。この状況を受けて、さんさんプランにおける多人数単学級となり、非常勤講師 2 名が配置された。

春の緊急事態宣言により、5 月末から通常の学校生活を行う状況下、小学校 6 年間 2 つの学級で学んできた 1 学年は、児童が転出したことで、中学校で初めて 40 人学級となった。本来であれば、入学当初に行われる集団づくりや春季大運動会、部活動への参加を経て中学生らしさを身につける時期だが、分散登校や午前中だけの教育課程に、ぼんやりとしたスタートになってしまった。また、40 人学級用の教室をと、特別教室を広げ増築してもらったが、今回のコロナウイルス感染予防対策の為「教室における密を防ぐ」という指導に、隙間なく並んだ机の列を目の前に、どうすればいいのかと頭を抱える状況でスタートした令和 2 年度となった。

2 実践

(1) 運用の方針

- ① 40 人学級の授業では、できる限り T T 指導を行い、必要な生徒に必要な支援を行う。
- ② 単元（学習内容）によって、必要に応じ、学級の人数を半減させ、生徒一人ひとりの進捗や理解度に合わせた指導を実践する。
- ③ 学校経営の基本を「授業づくり」におき、生徒や教職員の学び合いを推進する。

(2) 具体的な取組み事例

① T T 指導による学び方の定着

昨年度までコの字型で授業を行っていたが、コロナウイルス感染防止から、講義型（全員が黒板に向かって座る）に戻した。しかし、40 人学級で、教師が黒板の前に立つと、後部 7 席目の生徒の机の上は全く見えない状況に、生徒が学びからこぼれ落ちてしまうと懸念する声が職員間でも交わされるようになった。しかし、感染対策を講じながら 4 人グループにすることで、教室内に空間が生まれ、生徒との距離が縮まり、個々に何を考えているかも把握しやすくなった。

本校では、1 学年と 2 学年の全教科、3 学年の英語と数学は、T T 指導を行っている。仲間とともに学ぶ、仲間を頼るスタイルを定着させたいという思いから、T 2 で入っている教員は、学び方を支援するという意識で授業に出ている。複数で授業を担当することによって、授業自体が開かれ、教材や指導の工夫が見られるようになってきている。

② 少人数指導による学習内容の定着

1 学年の英語の授業では、単元（教材）によって、習熟を意識し、40 人学級を 2 組に分けた授業を取り入れている。例えば、授業時間の前半、一方のグループが、単元の学習事項に関するコミュニケーション活動を行い、もう一方のグループは、隣室で同単元の単語や語順を身につけるための学習を行う。後半は、その逆となる。人数を半減することで、一人ひとりに目が行き届き、つまずきへの対応が迅速にできるとともに、生徒同士のコミュニケーション機会を増やすこ

とが実現できている。また、それぞれの活動時間を短く区切ることで、集中して学習に取り組めるようになってきている。

③ 生徒の学びを検証する事後研修会の積み重ねによる授業改善

本校では、事後研修会に、数名の生徒を参加させ、生徒から見た「授業の学び」を生徒自身が語る場を設けている。

《3年数学の事後研修会より》

生徒（以下S）：（授業の）はじめは、すごく簡単だと思ったけれど、考えれば考えるほど、難しいと思えてきました。難しい問題でした。

参加者（以下T）：同じグループでM子がA子に、考え方を説明しているとき、あなたはどんなことを考えていた？

S：ん～、説明しているな、と思ったのですが。僕も補足しようと思ったのですが。・・・今日は、欲がでました。

T：欲って？

S：一緒に考えてもよかったけど、今日は、僕も夢中でした。途中で止められなかった。僕的には、人には自分が完璧になってから、伝えたいと思っています。自分が悩んでいる状況では、まだまだだと思っています。

T：あなたは、こういった学習のメリットをどう感じていますか。

S：周りに、気軽に聞くことができる、と同時に一人で集中することもできます。でも、自分がちゃんと理解してからでない、説明はできないなあ。



以上の生徒の言葉から、教師はグループに入って、安易に「（他の人に）教えてあげて」と言うのではなく、生徒にもタイミングがあることに気付かされる。生徒が、授業をどう感じているかを知ることの積み重ねが、「探究的な学び」のある授業づくりにつながっている。

3 成果と課題

(1) 工夫された学習スタイル

TT指導やクラスを二つに分けた授業の実践を通し、既存の授業スタイルにとらわれずに工夫したり、改善したりする試みが見られた。習熟の場を効果的に取り入れることができた。

また、年間を通して行ってきた授業研究会と、生徒が参加しての事後研修会を通し、より「生徒の学び」に軸をおいた授業づくりを意識できるようになってきている。



(2) 限られた時間の活用

6時間勤務の非常勤講師（2名）の配置は、時間割編成にも制約があり、学校行事や諸会議等、様々な配慮が必要であった。中でも、校内研修会は、学校で目指す授業を、全職員で一体となって共有する大切な場として、学ぶ場や時間を十分に確保できるよう設定したい。

(3) 教科担任としての専門性を生かす

中学校では、教科担任制であるが、非常勤講師の配置が必ずしも教科を選択できる状況にはなっていない。学校として強化したい教科について対応できるような配置が望まれる。また、今年度は、1、2学年が多人数単学級で加配措置が2名であったが、来年度は2、3学年が多人数単学級となるのに対して、制度上1名の配置となる。学校の置かれている状況に応じ、柔軟に対応できるような制度設計を期待したい。

**特別支援学級 学級編制基準の引き下げ
生活に使える力の定着をめざした教科指導の充実
山形市立第三小学校**

1 本校の実態

本校の特別支援学級在籍児童は、知的障がい特別支援学級在籍が7名（2年生2名、3年生1名、4年生1名、5年生2名、6年生1名）、自閉症・情緒障がい特別支援学級在籍が8名（1年生1名、3年生1名、4年生2名、5年生4名）の計15名である。どちらの学級も8名以下なので、本来であれば1学級ずつになるが、県のさんさんプランによる特別支援学級編制基準の引き下げにより、どちらも2学級編制となっている。知的障がい特別支援学級は2・3年生3名、4～6年生4名の2クラスに分けている。自閉症・情緒障がい特別支援学級は1～4年生4名、5年生4名の2クラスに分けて学習を進めている。

少人数になることでより実態に即した指導が可能となり、生活に使える力を着実に定着できると考えた。

2 実践

(1) 運用の方針

- ① 一人ひとりの実態に応じた課題設定と支援、見取りと評価を一体的に行えるようにする。
- ② 知的障がい特別支援学級と自閉症・情緒障がい特別支援学級の学びを交流することで、見方・考え方を広げていく。

(2) 具体的な取組み事例

- ① お金の学習（知的障がい特別支援学級：4～6年生4名）

【実態】

A児	6種類の硬貨を弁別できる。 1円玉が○枚で○円、10円玉が○枚で○十円ということは分かる。
B児	1種類の硬貨を使って品物の代金ちょうどの金額を出すことができる。
C児	
D児	

【ねらい】

A児	品物の代金ちょうどの金額を出すことができる。
B児	5円・50円・500円玉も使って品物の代金ちょうどの金額を出すことができる。 切り上げの考え方で、おつりをもらえるお金を出すことができる。
C児	
D児	



まずは、お菓子の空き箱に値段シールを貼ったものを用意し、ちょうどの金額を出せるように実際のお金を使って練習した。

A児には位取り表を用意し、位取り表に自分で数字を書いて、その枚数だけ硬貨を並べるように支援した。

B・C・D児には、数を「5といくつ」に分解して5円・50円・500円と、あといくら出せばよいかを考えるように言葉がけした。

一人ひとりの実態とつきたい力に応じて支援したことにより、4人ともねらいを達成することができるようになった。

次に、実際にスーパーで買い物をした。事前に、家の人に何を買ってきて欲しいかを聞き取り、生活の時間に近くのスーパーに買い物に出かけた。

A児は、授業で使った位取り表をスーパーに持って行き、スーパー内でもそれを活用し、自分で正しい金額のお金を並べることができた。

B・C・D児は、自分で数を「5といくつ」に分解して5円・50円・500玉を入れながら、ちょうどの金額を取り出して支払うことができ、身につけた知

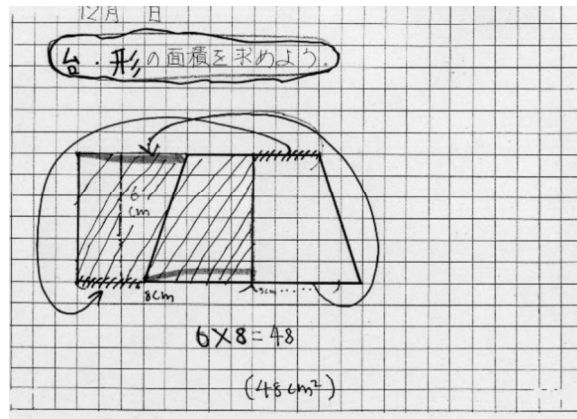
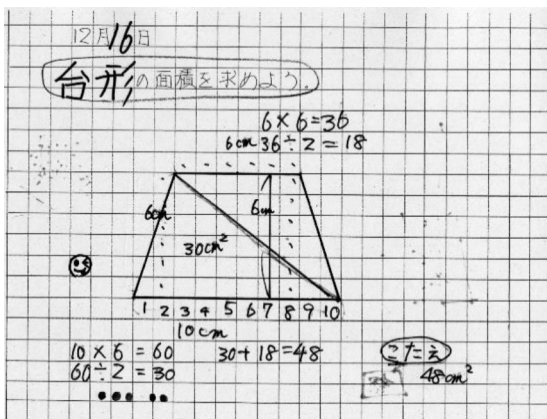
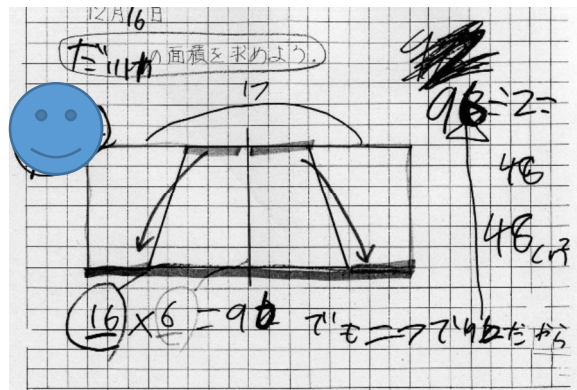
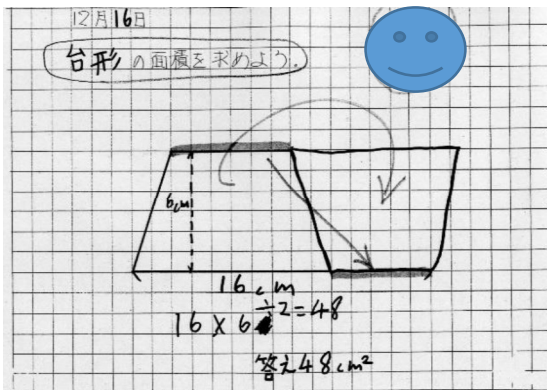
識・技能を、生活に使える力とすることができた。

② 四角形や三角形の面積

(知的障がい特別支援学級、自閉症・情緒障がい特別支援学級の合同授業)

5年生の面積の学習のねらいとともに、知的障がい特別支援学級の5年生2名には、いろいろな考え方ができるようにというねらいを、自閉症・情緒障がい特別支援学級の5年生4名には、望ましい学習態度を真似できるようにというねらいを設定し、5年生6名の合同学習を行った。

平行四辺形や三角形の面積を求める学習を通して、等積変形や倍積変形について理解した上で、台形を求める学習を行った。授業の後半に、お互いの考えを发表或し聞いたりする時間を設けたことで、「友達と違う求め方を考えよう。」と意欲的に学習に取り組む姿が見られた。



3 成果と課題

(1) 成果

実生活と結び付けた課題の設定により、どの児童も主体的に学習に取り組むことができるようになった。課題解決の場面では、1学級の人数が少ない分、一人ひとりに応じたより細やかな支援をすることができる。特別支援学級に在籍する児童の個人差も大きくなっていることから、特別支援学級の学級編制基準の引き下げにより、個別の実態に応じた支援や学習の準備にあたることができたことは大変ありがたい。また、教員の数が増えたことにより、ねらいに応じて様々な学習グループを編制し、学習の定着を図ることができた。

(2) 今後の課題

在籍児童の少人数化で、より細やかな支援ができるようになったため、一人ひとりの実態に応じたねらいを明確にし、指導にあたっている。今後、より教科でつきたい力に迫るため、学習形態や学習方法等を工夫し、教科で身につけた力が生活に使える力となるように支援していきたい。

小学校低学年副担任制
一人ひとりに対応し、個の力を伸ばす指導の在り方
庄内町立余目第二小学校

1 本校の実態

本校は、余目駅から約 900m で、商業地域近くに位置している。18 の地区から児童が通学しており、遠距離の 4 地区は通年バス通学をし、6 地区の児童は冬期間バス通学をしている。「夢をもち、未来を拓く子どもの育成」を学校目標とし、学校・家庭・地域が子どもを中心とした同心円で共に歩む学校づくりに取り組んでいる。

学校規模は、全校児童 208 名、特別支援学級 3 学級を含む全 10 学級である。児童数の減少により、多人数単学級が多く、第 1 学年（36 名）と第 2 学年（34 名）で副担任として非常勤講師が配置されている。

児童の実態として、明るく素直で、真面目に取り組む良さがある反面、主体性やチャレンジ精神をさらに伸ばす必要性を感じている。また、学力面では、個別に支援を要する児童や個人差への対応が課題である。

2 実践

(1) 運用の方針

- ① 副担任として学級に入り、学習指導・生徒指導を行うことで、一人ひとりに学校生活における満足感や達成感を与える。
- ② 担任複数制とすることで、よりきめ細かな指導を行い、児童一人ひとりが安心して学校生活を送れるようにする。

(2) 具体的な取り組み事例

- ① 学習中の支援と役割分担の工夫
 - ・基本的に担任が T1 で授業を進め、つまづいている児童を中心に副担任がヒントを与えたり支援したりした。
 - ・発表の場面では、担任が授業を進めつつ、副担任が発表の仕方についてさりげなく支援し、ふさわしい言葉を使用できるよう指導できた。
 - ・プリントでの練習や作業の場合は、学級を 2 組に分けて支援やチェックを行っているため、個々に十分目配りしたり、直しを徹底したりできた。
 - ・点検業務を主に副担任が行うことで、担任が教材準備をこれまで以上に充実させることができた。
 - ・授業の前に簡単な打ち合わせを行い、学習内容に応じてどの場面でどのようにサポートするか確認しながら進めるようにした。
 - ・特別な配慮を要する児童について、他の児童と同じ活動が困難な場合には、副担任が支援を行い、その子に合った対応をするよう最大限努めることができた。



② 効果的な宿題やプリント、点検カード等の見取り

- ・登校後から朝活動の時間に、副担任が検温カードや提出物、連絡帳の点検を行っている。担任は、子ども達の様子をよく見て声をかけたり、朝学習や朝読書の活動に専念したりでき、朝の活動を充実させることができた。また、早い時間にカード類や提出物のチェックが済むため、個々への対応も早くできるようになった。
- ・宿題についても、副担任が点検を行い、十分出来ていないところについて担任がその日のうちに対応することができた。即日、返却が可能になり、子ども達の意欲向上にもつながった。

③ 子どもとのかかわりの充実

- ・休み時間も複数の目で児童の様子を見ることができ、ちょっとしたトラブルにも機を逃さず対応することができ、子ども達の安定につながった。特に、1年生は、スムーズに学校生活になじむことができた。
- ・担任業務を分担して行うことができるため、担任も副担任も児童の話に耳を傾ける時間ができた。一人ひとりの様子をよく観察し、児童理解に努めている。お互いが情報交換し、それを元に、家庭とのコミュニケーションもこまめにとることができた。
- ・健康診断や教育相談週間の個別面談の時間も、授業や活動を進めながら実施することができ、これまで以上に指導の充実が図られた。
- ・感染予防のための消毒や手洗いの見届けを副担任が行うことで、担任が給食指導や児童への対応に集中できるようになった。
- ・徒歩で帰る児童とスクールバスの児童の担当を分担して行うことができた。

3 成果と課題

(1) 複数体制での指導について

- ・多人数学級でも2人体制で指導することで、学習・生活両面にわたってきめ細かな指導を行うことができた。1年生は、スムーズに小学校生活がスタートでき、安心して生活することができた。
- ・学級担任が2人いることで、子ども達との対話が増え、子ども達が学校生活を安心・安定して送ることができた。
- ・特別な配慮を要する児童への学習支援を行うことができ、他の児童も安定して生活することができた。
- ・すぐに打ち合わせがしやすいように、職員室でも隣の席にしているが、副担任の勤務時間が限られているため、情報交換や打ち合わせの時間を十分にとれないことがあり、課題と感じた。



(2) 分担について

TTとしての支援以外にも、ノートやプリント類の点検、下校指導や給食準備等多方面にわたって副担任が積極的に関わり、子ども達への指導を充実させることができ、担任の負担軽減にもつながった。

**教育マイスター制度 小学校教育マイスター
校内研究の推進に向けて連携する教師集団の育成をめざして
鮭川村立鮭川小学校**

1 本校の実態

本校は、全校児童 170 名、9 学級（各学年 1 学級、知的・情緒・肢体不自由）で、今年度、統合より創立 10 周年を迎えた学校である。それまでは、村内に 4 つ（鮭川・大豊・曲川・牛潜）の小学校があったが、児童数の減少に伴い、新生鮭川小学校としての歩みを始めた。村内に 1 小 1 中学校であることから、中学校と同じ校内研究のテーマを設定して、小中一貫教育に力を入れている。

外部講師の支援を受けながら、学校・学級カリキュラム・マネジメントを作成・活用して教育目標の達成に努めている。校内研究教科（算数）の重点単元を設定するとともに、育成する資質・能力を総合的な学習の時間と生活科と往還させることを目的としたカリキュラム・マネジメントを行っているが、1 学年 1 学級のため、個々の取組みをどう学校全体に広げるかが課題の一つである。そこで、校内研究をはじめとした種々の取組みを推進するために、教育マイスターを活用してきた。

2 実践

(1) 運用の方針

各教員が授業力を向上させるには、日々の実践の充実が必須であり、それが児童の変容につながっていくとの認識のもと、特に次の点に力をいれてきた。

- ① 教育マイスターが学習指導部長を兼務し、校内研究を含めた「まなび」全体を把握する。
- ② 校内研究の教科（算数）を中心に授業参観や T T 指導を行い、日常の実践を充実させる。
- ③ 授業づくりについて情報交換し、授業力を高め合う。
- ④ マイスターの研修報告により実践的な情報提供を行い、個々の授業力向上につなげる。

(2) 具体的な取組み事例

① 「まなび」づくりの推進

毎月の職員会議に向けて部会（チームミーティング）を行い、計画の進捗状況を把握している。チーフがマイスター教員で、研究主任も学習指導部に属しているため、情報共有を図りやすく、月毎の取組みの中に研究推進に向けた内容も取り入れやすかった。授業研究会を通じての成果や反省も「まなび」づくりの一環として積み上げることができた。また、学び合いの充実と高め合う場面づくりに重点を置いた授業の基本スタイルを「鮭小スタンダード」として確立することや、重点単元の取組みなども共通理解を図りながら進め、担任団の足並みをそろえることができた。

② 授業参観を日常的に推進するための工夫

教育マイスターが授業に入ることを想定した時間割を作成し、各担任もマイスターも時間調整を毎回しなくてもよいタイムスケジュールを組んでおくことにした。それを基本としながら、授業進度や行事等と調整して授業参観を行う。この方法により、マイスター教員も担任も見通しをもって臨むことができた。職員全体に、2～3 週ごとに変更点を記載し

	月	火	水	木	金
月日	7月6日	7月7日	7月8日	7月9日	7月10日
予定など	校内研修	（研修継続） スマイル教室	クラブ活動	教育委員会主催 研修	授業参観日
2時間目			4年	1年	2年
3時間目	6年	5年			
4時間目					
備考					

	月	火	水	木	金
月日	7月13日	7月14日	7月15日	7月16日	7月17日
予定など	研修（研修継続） 鮭川10周年記念行事	全町集会 4,5,6年 鮭川10周年記念行事		授業参観学習 スマイル教室	授業参観学習
2時間目			4年	1年	2年
3時間目	6年	5年			
4時間目					
備考					

た計画を提示した。その計画表に合わせて管理職や教務が授業参観をしたり、初任者研修を行ったりして日常的に研究を意識することができた。

日々の指導の充実を図るといふねらいから、授業参観の時間に合わせて授業進度を調整することも行わないようにした。その日が習熟の時間であれば、マイスター教員はTTとして担任の支援を行った。

③ 授業づくりについての情報の蓄積

マイスター通信を発行し、授業参観・TT指導を通して気付いたことを伝え、情報の共有化を図った。思考スキルや思考ツールの使い方が具体的に分かり、自分もやってみよう、自分の学年ならこうすればできそうだったといった個々の実践意欲の向上につながった。

また、研究の視点や内容に合わせた記載は、授業の構成を考える上で大変有効であった。担任団が、視点ごとの悩みを解決するためのヒントを得ることができて研究推進につながった。

授業参観終了後は、短時間でも授業者と話し合う場を設けるようにした。本時は研究のどの視点に力を入れたのか、日頃の悩みや困っていることはないかなど、OJTを充実させることにもつながった。授業直後に話ができない場合には当日中に行うようにして、授業参観の成果が次の日につながるよう配慮した。

④ 研修報告での情報伝達

マイスターが校外で行った研修について、職員会議の資料として研修報告を載せ、定期的な情報提供が行われた。地域での先進的な取組みや新学習指導要領の推進の方法などに触れることで、刺激を受けたり自己の授業を見直す機会となったりした。

3 成果と課題

(1) 成果

- ・マイスターによる授業参観が日常の研究意識を高める動機付けとなり、視点に合わせた授業改善に継続して取り組めた。授業研究会が充実するとともに、学習指導全般とのつながりが深められ、年間を通して校内研究を推進することができた。
- ・マイスターからの情報提供により、一人ひとりの取組みが広がり、幅広い取組みとなった。マイスター通信を通して、日常会話の中で授業の話が飛び交い、教員同士のコミュニケーションも活発になった。

(2) 課題と今後の方向性


- ・マイスターと授業者が情報交換をする時間の確保が難しかった。直接話す時間が取れなくてもマイスターのアドバイスや感想が伝わる「記録シート」を用いて情報共有の仕組みを整えて、実践や成果を積み上げていきたい。
- ・諸行事等で授業参観の予定が変更になる場合が多かった。多忙が予想される時期は予め計画からはずしたり、重点単元のときに回数を増やしたりするなど、柔軟な対応を探りながら、実践を進めていきたい。

算数の授業作りのために・・・ 学ばせていただいたこと②

いつも授業参観・TT指導へのご協力ありがとうございます。各学年の授業におじゃまして、学ばせていただいたことを紹介していきます。ご一読、よろしくお願ひします。

①板書・掲示構成の工夫


・前時のひし形の公式をもとに、本時のたこ形の公式作りを行う授業でした。前時での学習を想起しながら考察できるように、ホワイトボードに前時での児童の学習プリントを提示していました。児童は、これらをもとに自分の考えを持ち、たくさんの考えを類型化したりできていました。本時での学習内容は、黒板に記録していきます。有効な活用の仕方だと感じました。(5年)



②思考を深めるための工夫

・児童はひし算の考え方をさくらんぼの図に表すほかに、言葉でも説明できるよう思考の流れにそった穴あきの学習プリントを活用していました。グループで話し合いながら書き進めることができていました。(1年)

・葉っぱつきのさくらんぼの図を使って、図に数字を書き込みながら考えを深める様子が見られました。児童の思考の流れに合わせて、「100が〇でいくつ」や「〇は100がいくつ」を考えるための思考ツールとして有効だと感じました。(2年)



など、学ばせていただき、自分の授業に生かしていきたいと感じた点です。(まだまだたくさんありますが...)なお、上述について、授業をさせていただいた先生より、付け足しや訂正があればご意見をお待ちしております。今月も参観やTT指導でおじゃまさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

< 研究の視点 >

- 視点1**：ねらいを明確にした
必要感のある課題の提示
- 視点2**：考えが広がる授業展開
- 視点3**：学びが実感できる
ふり返りの場の設定

教育マイスター制度 小学校教育マイスター 教師の「授業力の向上」をめざして

飯豊町立第一小学校

1 本校の実態

本校は飯豊の美しい散居集落の中にあり、平成 28 年 10 月に待望の新校舎が竣工した。今年度は創立 50 周年という記念すべき年を迎え、全校児童数 168 名（各学年 1 学級に特別支援 2 学級）がその素晴らしい環境の中で伸び伸びと学校生活を送っている。県学力等調査の結果は、国・算ともに知識や技能を問う問題はおおむね良好であるが、それらを活用する問題や、特に算数での探究型思考を問う問題の正答率に課題があった。このような実態を受けて、今年度から学校研究で算数科における「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善に取り組み、日々実践を重ねている。若手教員の多い職員構成であることから、担任同士が日常的に授業改善について話し合う機会を大切にした取組みを全職員で進めているところである。



2 実践

(1) 運用の方針

- ① O J T 推進により職員全体の授業力・担任力の向上
- ② 探究型学習の視点を活かした授業改善の推進と学校研究の充実
上記①、②の取組みによる児童の学力の向上

(2) 具体的な取組み事例

① 若手教員への授業づくりのアドバイス

教育マイスターが若手教員へアドバイスをしながらともに授業づくりを行う機会をもった。また、教育マイスター自身の授業を若手教員に見てもらい、実践後に成果と課題についてさらに話をすることで、互いの授業実践にもつなげていけるようにした。その取組みを継続することで、若手教員が自分の授業について課題意識をもち、積極的に質問する姿が見られるようになり、主体的に授業改善に取り組めるようになってきた。

② ベテラン教員による O J T



算数科以外でも、ベテラン教員が各自の得意とする教科等の授業を公開し、若手がそれを参観する仕組みを作ることによって校内 O J T の推進を図った。ベテラン教員には事前に「何の教科のどの単元」を「何月頃」に公開できるかアンケートを取り調整した。略案などもなしで、45 分全部見なくてもよいこととして、負担を軽減した。参観者は授業参観で得た気づきや、さらに聞きたいことなどをカードに記載し授業者に戻すこととし、互いに授業づくりについて学べるようにした。

③ 日々の授業実践の共有化

事前に教育マイスターが授業を参観することを伝え、参観で見つけたその授業のよさ、ポイントや技をマイスター通信「めざせ！探究型の授業づくり！」としてまとめ、全職員に配付し、職員室内に掲示した。「マイスター通信」を読んでもらうことで、教員一人ひとりの良い実践を共有することを目指した。

教育マイスター制度 中学校教育マイスター
探究型学習等を通じた共に学び合い共に高め合う生徒の育成
村山市立葉山中学校

1 本校の実態

本校の学区は村山市の西部、最上川の西側、霊峰葉山の麓にあたり、大久保・富本・戸沢・富並の4つの小学校から集まってきている。生徒数177名で各学年2クラスと特別支援学級2クラスの計8クラスである。創立以来、全国でも数少ない教科教室型の授業形態をとっており、全ての教科の学習を、独自の教室に移動して行っている。各階の教室前には学習センターがあり、放送設備、インタラクティブ機能搭載プロジェクター、大型TVやPC等が配置されるなど学習環境が整っている。

昨年度の生徒の実態や授業の課題としては、次のことがあげられる。

- ①グループやペア等の小集団の交流に比べ、全体の場での交流が盛り上がりがないこと
- ②考えの表現に消極的な生徒を、いかに学習活動に引き込んでいくかということ
- ③課題解決のための有効な協働学習のあり方を見極めること

2 実践

(1) 運用の方針

本校の学校教育目標「21世紀を主体的に生き抜く力を身につけた生徒の育成」を具現化するために、校訓【飛翔・友愛・探究】とめざす生徒像の関連については次のように捉えている。

飛翔：挑戦する力（主体的な学びの姿）

課題を自分ごととしてとらえ、解決に向けて粘り強く活動し続ける生徒

友愛：かかわる力（対話的な学びの姿）

他者との交流を通し、自分の考えを広げたり深めたりする生徒

探究：よりよく課題を解決する力（深い学びの姿）

既習事項を選択・活用し、納得のいくよりよい考えを導く生徒

学校経営の基本方針は、「授業で生徒を育て（授業によって、学力、人間性、心身の健康を育てる）、授業で教職員の資質・能力を伸ばし（授業づくりを通して、担任力を伸ばす）、授業で信頼を高める学校（授業で培われた子どもの姿によって、保護者や地域の方々からの信頼を高める）」である。学校教育の成果は、生徒の学びの姿そのものである。11月に行われた村山市教育委員会委嘱の公開研究発表会に向けて、探究型学習等による授業改善、学習法講座について主に取り組んできた。

(2) 具体的な取り組み事例

教育マイスターを中心に以下の取り組みを行い、学校全体で授業改善に取り組んだ。

- ① 研究主任との連携による探究型学習等の授業改善コーディネート
 - ・教科教室型運営部会のメンバーで、各教科教室や各階の学習センターを回り、机やホワイトボードの配置、活用方法の検討、掲示物の点検を行った。それにより、他の学年の生徒がその教室に入っても、学習の意欲も高まり、見通しを持って学習に取り組むことができるようになった。
 - ・同じ教科だけではなく、教科の枠を超えて授業について話し合うことができるよう、指導案検討会や事後検討会等の分科会メンバーを編成することにより、教科部会だけでは気づかない視点でも話し合うことができた。

教育マイスター制度 中学校教育マイスター
数学を重視した学力向上のための授業改善の取組み
南陽市立沖郷中学校

1 本校の実態

本校は平成 22 年度に旧梨郷中学校と統合し、今年度で創立 10 周年を迎える。在籍生徒数は 233 名、普通学級 7 学級及び特別支援学級 4 学級の計 11 学級の中学校である。

本校は、集中して学習に取り組んだり、与えられた課題に一生懸命取り組んだりする生徒が多い。学んだ内容を知識として答えることはできるが、その知識や技能を生かして考える問題に対して答えられる生徒は少ない。

ここ数年の全国学力・学習状況調査の結果を見ても、本校の数学の平均は全国平均を下回っている。多くの生徒は、数学を学ぶことは大切であり、将来役に立つものと感じているが、実際に問題を解く中で、数ある解法の中から最も適したものを考えたり、説明問題や証明問題を最後まで書こうとしたりする生徒は少ない。他教科との関連も含め、数学における学力向上が課題であるため、昨年度と今年度の 2 年間、数学科の教員が教育マイスターを務め、本制度を活用して課題解決を図っている。

2 実践

(1) 運用の方針

- ・上記の課題解決に向けて、数学科の教員を教育マイスターとする。これまでの数学の各種テストを分析し、普段の授業や研究授業を通して授業改善に努め、数学における「確かな学力」を育成する。
- ・学校研究を通して校内 O J T を充実させ、学校全体の授業改善に対する意識をさらに高めていく。
- ・外部研修で学んだ内容を校内研修で報告し、共有化を図り、授業改善につなげていく。
- ・南陽市の重点教育の 1 つである小中一貫教育を推進するために、校区内の小学校と連携して、算数・数学の学力向上を目指す。

(2) 具体的な取組み事例

① 数学の学力向上に向けた実りのある研究授業の実施



本校は研究授業を年 2 回実施している。指導案検討時は 3 つの視点「課題設定」「学び合い」「振り返り(単元指導計画)」に沿って検討を行っている。

昨年度は数学の研究授業を 2 回行った。第 1 回では教育マイスターが授業を行い、第 2 回では教育マイスターと連携し、他の数学科の教員が授業を行った。助言者として早稲田大学の小林宏己教授を招聘し、指導・助言を頂いた。その内容は次の通りである。

- ・ねらいを明確にし、生徒がどのように変容したかを授業の中で捉える。全生徒を見取るのは難しいので、3 名の生徒を抽出し、変容をしっかりと見取る。
- ・生徒が主体的に学ぶために、分かる生徒は周りとはシェアし、分からない生徒は分かる生徒に声かけできるような学び合いの場を設定する。
- ・教師は生徒同士の関わりの中で、必要に応じて後押しをしていく。
- ・学びの振り返りを大切にし、生徒に言語化させることで資質や能力を育てる。

昨年度の研究の成果と課題を受けて、今年度は、コロナ禍においてどのように学び合いの場を設定し、生徒の協働的な学びを充実させ、学力向上につながるかということ視点を1つとして研究を進めた。ペアでの確認や短時間での教え合い、発言の機会を保障することによる意見共有など、普段の授業で継続して行い日常化を図っている。

② 校内OJTの充実



若手教員の授業づくりに積極的にに関わり、TT指導に加え、よりよい授業が行えるよう、授業の進め方を中心に指導・助言を行った。校内の初任者研修の一環として、道徳の授業づくりについてもアドバイスをを行うなど、初任者研修とタイアップしながらOJTを推進している。

教育マイスターが定期的に授業参観できる校内体制を整備し、助言を行うことで職員の指導力向上を図っている。また、道徳授業研究会など職員のニーズに応じた校内研修をコーディネートし、職員の研鑽の場を創出することにも努めて取り組んでいる。

③ 外部研修の報告と実践

昨年度の滞在型研修で訪問した茨城県大洗町立南中学校、筑波大学附属中学校、県立東桜学館中学校の取組みから本校の実践に生かせる点を取り入れている。その中で、数学科ではTT指導を生かすために、授業初めの5分間でT2を中心とした計算演習を行い、生徒の基礎基本が確実に定着できるように努め成果を上げている。また「探究型学習」における総合的な学習の時間の重要性を再確認し、総合的な学習の時間の在り方について見直しを図っている。

④ 小中一貫教育を意識したマイスター制度の活用

校区内の小学校とお互いに算数、数学の授業を参観し合い、それぞれの視点から意見を述べ、次の一手につなげた。また小学校の若手教員育成のために、中学校マイスターが算数の授業を参観し、算数・数学における系統性や児童のつまづきに対する指導のポイントなど、専門的な立場でアドバイスをを行った。

3 成果と課題

(1) 成果

- ・数学の学力向上に向けて、昨年度から毎時間取り組んでいる5分間の計算演習を積み重ねた結果、3年生のテスト分析から平均点が上昇していることが分かった。数学の基本的な知識や技能について、学年全体を通してわかる・できる生徒が増えたことにつながったと思われる。今年度は理科においても同様の取り組みを行い、少しずつ力を伸ばしてきている。

(2) 課題

- ・全国学力・学習状況調査等の結果分析を丁寧に行い、基礎基本の定着に加え、「確かな学力」を身に付けるための授業づくりや指導法の改善に取り組んでいく。
- ・3つの視点を踏まえた教科の指導方法について、小中一貫教育の指導力向上の先導に努めていく。
- ・学習指導要領の改訂に伴い、評価の見直しと捉え方について、伝達講習の場を設ける。

【つけたい力を明確にした、教科の本質に迫る授業による「確かな学力」の育成】

“教育山形「さんさん」プラン”を生かした授業改善のポイント 村山教育事務所

1 はじめに

村山管内の各学校では、“教育山形「さんさん」プラン”を生かしたきめ細かな指導を基盤とした授業づくりが行われ、一人ひとりの「確かな学力」の育成を目指し、「探究型学習」等による授業改善を日常的に行おうとしている。今年度は、小学校において新学習指導要領が全面実施となり、各学校において「指導と評価の一体化」の視点を大事にした授業改善が推進された。また、コロナ禍の中、例年とは違う状況において教育活動が精選され、「つけたい力」をより明確にした取組みが行われている。

本プランを生かして学校教育の一層の充実を図るために、今年度も、村山教育事務所と管内各市町教育委員会による「教育山形『さんさん』プラン推進ワーキンググループ」を開催した。「少人数のきめ細かな指導による学校・学級の安定」や「学校研究の活性化と日常的な授業改善」、「コロナ禍における少人数を生かした対応」などの成果について情報交換を行うことができた。また、「教育マイスターの効果的な活用」や「特別支援学級における適切な支援」などの課題について協議し、共通理解を図ったうえで「確かな学力」の育成につながる支援を行っている。

2 村山管内における実践

(1) 「『確かな学力』を育成するための授業改善シート」の活

「令和元年度山形県学力向上検討委員会委員長メッセージ」を受けて、教科の本質に迫る授業改善について整理し、「授業改善シート」をリニューアルした。

* 「成果を生かして取組んでほしい点」と「課題改善に向けて重点的に取り組んでほしい点」を明確にして、令和2年度の授業改善のポイントを示した。

* 一連の探究活動のプロセスにおいて、学習活動を発展的に繰り返しながら学びの質を高めていく際に、どのプロセスにおいても「各教科の特質に応じた見方・考え方」を大切にすることを明示した。

要請訪問や学校経営計画指導訪問、学力向上支援チームによる学校訪問等における指導・助言の際に活用することはもちろん、各学校において日常の授業づくりの指針としていただけるよう、授業改善の4つの視点の詳細について示した別紙を作成し、各学校に送付した。

また、「生徒指導の三機能を生かした授業づくり」の教師用振り返りシートをセットで示し、“「さんさん」プラン”を生かしたきめ細かな指導の充実や、「確かな学力」の育成につながる授業改善の実現を目指した。

令和2年度「確かな学力」を育成するための授業改善シート

生徒の「主体的な学び」による「確かな学力」の育成を推進するために、以下の視点を大切にしながら授業づくりを行い、授業改善を進めよう。

- ① 教科書や教材だけでなく、生活や社会の中で学ぶ機会を大切にしよう。
- ② 教科書や教材だけでなく、生活や社会の中で学ぶ機会を大切にしよう。

「確かな学力」を育成するための授業改善シート

「確かな学力」を育成するための授業改善シート

「確かな学力」を育成するための授業改善シート

「確かな学力」を育成するための授業改善シート

「確かな学力」を育成するための授業改善シート

生徒指導の三機能を生かした授業づくり
— 教師用振り返りシート —

生徒指導の三機能を生かした授業づくり

「確かな学力」を育成するための授業改善シート

「確かな学力」を育成するための授業改善シート

「確かな学力」を育成するための授業改善シート

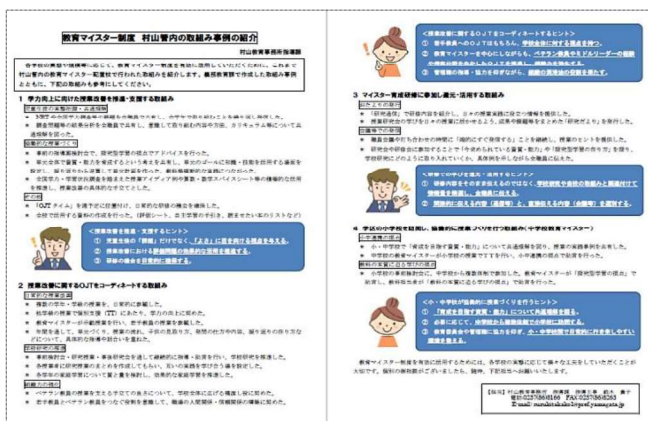
「確かな学力」を育成するための授業改善シート

(2) 学力向上支援チームによる継続的な支援

今年度は、村山管内の32校に対して年間各3回程度の学校訪問を実施し、授業改善のPDCAサイクルを組織的に機能させるための支援を行った。学力支援アドバイザーと指導主事の役割分担を明確にし、各学校の課題や悩みに対して個別の支援を継続的に行うことで、授業改善と組織力強化の両面での支援が可能になった。コロナ禍においても、支援を希望する学校に対してのかかわりを実現させることができた。

(3) 教育マイスター制度を活用した校内OJTの充実

令和2年度村山管内の教育マイスター配置校は27校であったが、今年度新たに配置された学校が多く、かつ、マイスターの経験がない先生方が大半を占めていた。そこで、年度当初に「教育マイスター制度 村山管内の取組み事例の紹介」を作成・配付した。グループ研修を通して教育マイスター同士の連携も生まれ、必要に応じて情報を共有しながら、各校における校内OJTの充実を図ることができた。



また、これまでの課題であった「小中連携の視点による協働的な授業づくり」についても、中学校の教育マイスターが学区の小学校に出向き、助言をしたり共に検討したりする機会が増えた。

また、これまでの課題であった「小中連携の視点による協働的な授業づくり」についても、中学校の教育マイスターが学区の小学校に出向き、助言をしたり共に検討したりする機会が増えた。

(4) 「組織力の向上」と「指導力の向上」を支援する教育事務所研修の実施

<学習指導力向上研修会>

新学習指導要領及び第6次山形県教育振興計画、「教育山形「さんさん」プラン」を受けて、年間2回の学習指導力向上研修会を実施した。「学校全体で育成を目指す資質・能力を踏まえたカリキュラム・マネジメントの推進」と「各教科の特質に応じた見方・考え方を働かせる深い学びの実現」の両方のバランスを大事にし、「指導と評価の一体化」を大切にしたい授業改善を支援することができた。今後、各学校の実践や様々な取組みを紹介し、次年度の取組みの質の向上につなげていきたい。

<ネットワーク型研修会>

9年間の系統性を踏まえ、新学習指導要領で育成を目指す資質・能力を確実に育むことを目指して6つの研修部会を設定し、年間を通して各部会のテーマに沿った研修を行った。

A：教科探究コース（教科の本質に迫る視点で学びを構築する）

5部会 国語 4名 算数・数学 5名 社会 3名 理科 2名 外国語 2名

B：カリ・マネ探究コース（教科等横断的な視点で学びを構築する）

生活科・総合的な学習の時間 7名

若手教員が多く、研修の学びを日常の実践に積極的に生かそうとする姿が見られた。

3 おわりに

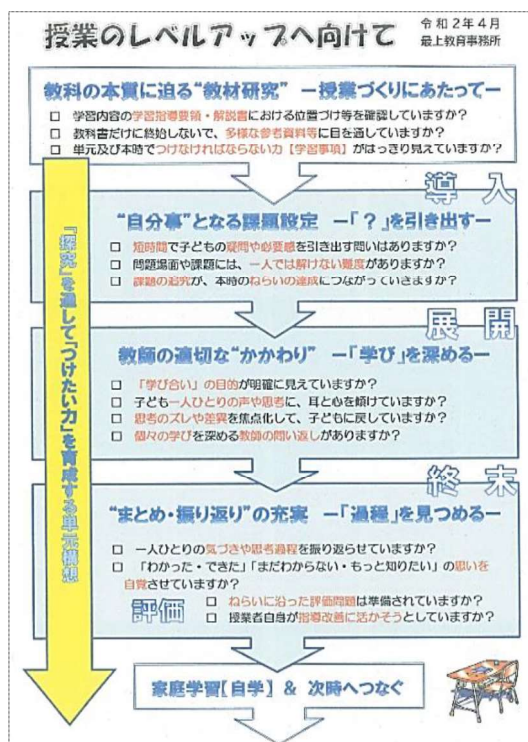
本プランを生かした「つけたい力を明確にした、教科の本質に迫る『確かな学力』の育成」をより一層推進していくために、管内の各学校の強みを把握し、市町教育委員会と力を合わせて、各学校の主体性を生かした支援を継続していきたい。

“教育山形「さんさん」プラン”を生かした授業改善のポイント 最上教育事務所

1 はじめに

今年度はコロナ禍の様々な制約がある中、各学校において、“教育山形「さんさん」プラン”による少人数の利点を生かしたより深い子ども理解のもと、子どもの思考に寄り添い、確かな力を育む日常実践が進められてきた。また、「魅力ある学校づくり調査研究事業」の実践により、「学校が楽しい」「授業が分かる」という子どもの声に耳を傾け、一人ひとりが分かる授業、魅力ある授業を目指した取組みが積み重ねられている。

最上教育事務所では、「授業のレベルアップへ向けて」等を通して、教科の本質に迫る教材研究、探究を通してつけたたい力を育成する単元構想、つけたたい力をつける主体的・協働的な授業のポイントを具体的に示し、学校訪問等で指導・支援してきた。



2 最上管内における実践から

(1) 「学習指導力向上研修会」から

児童生徒につけたたい力をつける日常の授業改善を目指し、アクションプランを効果的に活用した学校全体の取組みについて研修を行い、講義や協議を通して以下の内容を確認することができた。参加した教育マイスターや研究主任等により各学校でアクションプランのブラッシュアップが図られ、「全職員、全教科による育成したい資質・能力を意識した日常の授業改善」が進められている。

- ・学校教育目標等から、学校として育成したい資質・能力を明確にする
- ・全国学力・学習状況等調査等を活用し、観点に沿って実態を捉える
- ・学校教育目標と校内研究、アクションプランの記載内容に一貫性を持たせる
- ・「育てたい資質・能力」「指導・取組」を焦点化して実践する
- ・客観的な評価を取り入れ、PDCA サイクルを回し改善を図っていく

(2) 「もがみ授業改善研修『プロジェクトM』」の実践

算数・数学、英語の3教科で、探究型学習におけるモデル単元の開発と公開授業を行った。第1回研修会では、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」のポイントを確認し、プロジェクトメンバー間で教材研究、指導案の検討を重ね、授業を提案していただいた。

「探究型学習による授業を通して、児童生徒の“探究心”と“主体性”を育み、確かな学力をつけていく。」

- つけたたい資質・能力を明確にした単元構成
- 児童生徒にとって解決する価値のある課題の吟味
- ねらいが達成できる適切な言語活動
- つけたたい力に応じた適切な評価問題

【新庄市立萩野学園 第5学年 算数科 単元名「ならした大きさを考えよう」】

■解決する必要感のある課題の工夫

日常生活場面から児童が抱いた「1日にどのくらい水を使うのだろう？」という疑問から課題が設定され、児童が自分事として課題解決に取り組むことができた。身近な題材であることは当たり前として、解決する必要感のある課題について、さらに教材研究を充実させたい。

■学びを蓄積する振り返りの充実

学びの足跡として、「どんなことを学んだのか、考えたのか、間違ったのか」などを算数日記に記録していくことで、それまでの学びを振り返ることができる。新しい問いに出会ったときに、前時までの学びを生かして課題解決に向かうことができる有効な手立てとなっていた。



【大蔵村立大蔵中学校 第1学年 数学科 単元名「資料の活用」】

■つけたたい力を明確にした課題設定の工夫

単元でつけたたい力を「批判的に考察する力」とし、当該の授業では、「平均点を越えていれば、真ん中よりも上か？」という課題に取り組みせ、誤った認識を修正したり、目的に応じた根拠資料を活用して判断したりできるような学習活動や教材の工夫が見られた。さらに、日常生活と関連させた適応問題では、学んだことを生かして解決しようとすることができた。

■思考ツールを活用して学び合いを深める工夫

ホワイトボード上に得点カードを自由に並び替えながら学び合うことで、個々の考えが視覚化され、根拠を示しながら考えを出し合い、課題を解決することができた。今後は、ICTの活用により、短時間で効果的に操作活動を行いながら考えを深める学び合いも期待される。



【金山町立金山中学校 第2学年 英語科 単元名「Unit5 ユニバーサルデザイン」】

■学びを活用する単元構成の工夫

単元末にプレゼンテーションを設定し、学習したことを積み上げて伝えたいことが表現できるとともに、生徒自身が学びの成果を実感できるような単元構成の工夫があった。単元の中で数回に分けて身近な話題を題材とした自己表現活動の場を設けることで、単元末の社会的な話題についても表現できるよう意図された単元構成であった。

■意欲的な学びにつながる課題の明確化

「よさや特徴を分かってもらえるように表現する」という明確な課題が示され、学び合いの中でも改めて確認することで、生徒が課題から反れずに表現しようと思えることができた。



3 おわりに

各学校において、つけたたい資質・能力を明確に設定し、児童生徒が主体的、協働的に学ぶ授業づくりが進められてきた。さらに、以下のポイントを充実させることで、児童生徒個々の力を最大限に伸ばし、確かな学力を育成していきたい。

- ・育成したい資質・能力を明確化した単元構想
- ・見方・考え方を働かせ、深い学びを実現する授業改善
- ・目標と一貫性のある適切な問題・方法・場面による確実な評価

【つけたい力を明確にした、教科の本質に迫る授業による「確かな学力」の育成】

“教育山形「さんさん」プラン”を生かした授業改善のポイント 置賜教育事務所

1 はじめに

昨年度まで5年間の「さんさん」プランを基盤とした探究型学習の推進により、探究型学習の周知が図られ、管内の多くの学校で探究型学習による授業改善が進んでいる。

特に、学ぶ側の思考に立った授業づくりが進んでいること、課題設定や協働的に学ぶ場面の設定、振り返りの位置付け等、プロセスにおける工夫改善が進んでいることは大きな成果だと捉えている。

この成果を「確かな学力」の育成に確実に結び付けていくために、今年度置賜教育事務所では、授業づくりの重点を見直し、「つけたい力を明確にした、教科の本質に迫る授業づくり」を推進してきた。具体的には管内の学校が授業改善の拠り所とできるように「考える力を育む授業づくりのスタンダード」を作成し、これを管内の市町教育委員会及び各学校に送付して活用を促すとともに、要請訪問等での指導助言や主催事業に反映させ推進を図ってきたところである。

以下、「つけたい力を明確にした、教科の本質に迫る授業づくり」の推進の具体について紹介する。

2 「つけたい力を明確にした、教科の本質に迫る授業づくり」の推進

(1) 「考える力を育む授業づくりのスタンダード」を活用した授業改善の促進

【授業づくりの基本的考え】

具体化

【考える力を育む授業づくりのスタンダード】

	<生きる力の基盤となる確かな学力の育成>
①「つけたい力は何か」 そのために ②「何を学ぶのか」 「どのように学ぶのか」 ③「その学びに必要な力は何で、その力はどの程度身につけているのか」 ④「学びを成立させるために必要な手立ては何か」 そのために ⑤「つけたい力はついたのか」、「ついていなければどう補完するのか」	1 各種調査等の分析から見える児童生徒の実態把握と身につける力の明確化 指導内容に関する児童生徒の実態(何ができて、何ができないのか)を把握しましたか 学習指導要領の内容(何を学ぶのか)と児童生徒の実態を踏まえて、身につける力を設定しましたか 単元の目標を達成した姿(何ができるようになればいいのか)を児童生徒と共有していますか
	2 教科特有の見方・考え方を働かせながら課題解決していく学習過程(どのように学ぶか)の重視 働かせる見方・考え方(何を手がかりに考えるのか、着眼点は何か)を意識していますか 目標達成のために、一番考えさせたいこと(本時、単元)は何で、効果的な学習形態は何ですか 教科の本質に迫るための教師の手立て(深めるための問いなど)が明確になっていますか
	3 児童生徒の主体的な学びにつなげるための振り返りの場の設定 考えの広がりや深まりを自覚する振り返りになっていますか 単元全体の課題解決と振り返りがつながっていますか
	4 目標-指導-評価の一貫した単元・授業構想 学習指導要領の内容を踏まえ、目標を適切に設定していますか 学習過程において、必要に応じた学習状況の把握をしていますか 把握した学習状況に応じて、目標達成に必要な適切な指導をしていますか 目標に対する個々の学びの評価(力がついたかどうか)を確実にを行い、指導の改善につなげていますか
	(この欄は表の下部に追加された内容です)

これらを授業づくりの基本と捉えて、目標-指導-評価の一貫した授業が実施されるようにした。

(2) 「考える力を育む授業づくり研究会」でのスタンダードの具現化

小学校(国語、算数、社会)と中学校(数学)の4教科5部会で指導主事と教科研究員がチームになり、上記「考える力を育む授業づくりのスタンダード」に基づいた授業を構想し発信することで「つけたい力を明確にした、教科の本質に迫る授業」とはどのようなものか、その具体を示した。

算数については2部会、その他は1部会を設定し実施した。今後管内の教科指導の核となる若手教員を教科研究員に委嘱し実施した。

実践を通して得られた教科研究員の気づきと成果

<小学校国語> (第6学年で実施) 研究員 米沢市立北部小学校 鈴木 麻実 教諭

単元名 複数の文章を基に、「これからの社会と生き方」について自分の考えをもって話し合おう
教材名 『メディアと人間社会』池上彰、『大切な人と深くつながるために』鴻上尚史(光村図書)
資料 プログラミングで未来を創る

指導事項を教材で具体化していくための教材研究が何より大事であること、国語でもレディネステストを実施し課題を明らかにする必要があることに気付いた。筆者の主張を捉えるために、論の展開や表現の仕方に着目させたことが「言葉による見方・考え方」を働かせながら、叙述に沿って読み込む児童の姿につながった。

<小学校算数> (第5学年で実施) 研究員 米沢市立愛宕小学校 後藤 祐平 教諭

単元名 割合 比べ方を考えよう(2) (東京書籍)

つけたい力とレディネスの結果を結び付けながら、単元の構想や指導に生かすことが重要であること、つけたい力を明確にし、要点を絞った教材研究を行う必要があることに気付いた。数直線の読み取り、算数用語を用いた説明、求める量の見当などを意識して活用する指導過程としたことが、単元末にそれらを自在に使って思考する児童の姿につながった。

<小学校算数> (第4学年で実施) 研究員 高島町立高島小学校 山田 思美 教諭

単元名 分数をくわしく調べよう (東京書籍)

児童に働かせたい「数学的な見方・考え方」を指導者が意識することやつけたい力を明確にしたうえでレディネステストの問題を選定し誤答を分析することが、授業の効果を上げる上で重要であることが分かった。「単位分数」に着目させた指導を重ねたことが、テープ図で1を認識して等分しながら帯分数の減法の仕方を考え、説明する児童の姿につながった。

<小学校社会> (第4学年で実施) 研究員 高島町立屋代小学校 阿部 達也 教諭

単元名 「置賜に水を 黒井半四郎」

地域の歴史的な出来事を教材化するための教師自身の教材研究の深さがその後の授業に大きく影響すること、児童の思考の流れを意識して授業を構成することが大事であることに気付いた。思考ツール「クラゲチャート」の活用が児童の思考を助け、各自が調べた複数の事実を総合・関連付けて概念化する児童の姿につながった。

<中学校数学> (第3学年で実施) 研究員 小国町立小国中学校 佐々木 健吾 教諭

単元名 標本調査 (啓林館)

どのような力を身につけ、どのような姿に変化してほしいのかを具体的にイメージすることで、単元構成に一貫性が出てくることに気付いた。活動の必要性を明らかにして思考の流れに沿う形で活動を仕組んだことが、標本調査の妥当性を議論し、調査方法を洗練させて再考する生徒の姿につながった。

3 おわりに

指導内容に関する児童生徒の実態を事前にしっかり把握した上で単元を構想することがいかに重要であるかを実感した上記の取組みであった。細やかな診断的評価が可能になることは「さんさん」プランの強みである。その強みを最大限生かし、来年度も実りある実践を積み上げ、広く発信することで置賜管内の学力向上につなげていきたい。

“教育山形「さんさん」プラン”を生かした授業改善のポイント 庄内教育事務所

1 はじめに

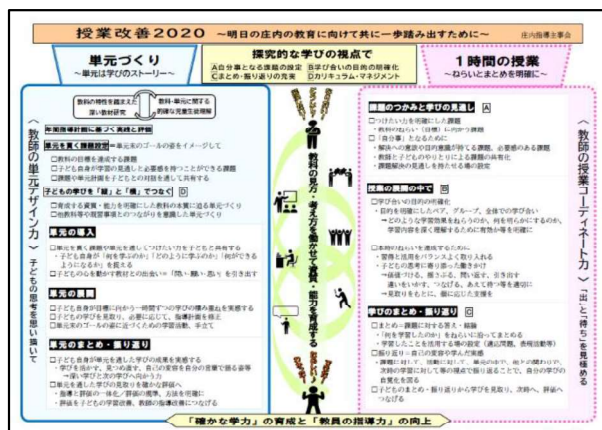
今年度、コロナ禍という今まで経験したことのない状況の中、管内各学校においては、確かな学力の育成を目指して、試行錯誤を繰り返し、様々な工夫をしながら、確実に丁寧な授業づくりがなされている。また、学校教育ならではの学びを大事にしながら教育活動を進めるために、「大切にしなければならないことは何か」「学校の役割とは何か」ということを問い直し、教育課程や学校研究、授業づくりの見直しが図られている。

その際、本プランの目的である「きめ細かな指導の充実」や「分かる授業」の大切さが再認識され、変化の激しい社会に対応できる資質・能力の育成、学校の組織力の向上、教員の指導力向上に向けて、意識が高まっている。

今こそ、本プランのよさを活かし、探究型学習の視点からの授業改善を推進していきたい。

2 授業改善2020～明日の庄内の教育に向けて共に一歩踏み出すために～

庄内では毎年、管内の市町教育委員会指導主事と教育事務所指導主事で学力向上に向けて協議を行い、成果と課題を確認し、次へ向けての一手を共有している。その際、授業改善に向けた指導の重点をワンペーパーで作成し、同じ方向を目指し、指導・助言に活かしてきた。探究型学習のポイントを「探究的な学びの視点」として示し、単元デザイン力と授業コーディネート力という2つの柱でまとめ、授業づくりの指針としている。



これまで、指導主事の資料とし、必要に応じて配布・活用してきたが、今年度より「探究型学習」等の視点からの授業改善をより推進してほしい、先生方の授業づくりの一助としてほしいという思いから全小中学校に配信することにした。新学習指導要領の趣旨も盛り込んでいるので、次年度は大きく変えずに、継続して先生方に伝えていくことで、力強く授業改善を進めていくことを庄内指導主事会議で確認し合った。

3 庄内管内における実践から

(1) “教育山形「さんさん」プラン”に係る非常勤講師研修会の実施

庄内では“教育山形「さんさん」プラン”に係る非常勤講師の先生方を対象に、それぞれの非常勤講師の配置の意図に沿って、少人数指導のあり方や生徒理解等について研修を深め、個々の資質の向上を図ることをねらいとして研修会を実施している。

今年度は、役職ごとの研修会を1回のみ実施した。T T指導や個別指導等で、実際に子どもたちの指導に携わる先生方を対象に、新学習指導要領の改訂の趣旨や学習評価の在り方についての研修会を行った。また、別室登校学習指導に関わる先生方を対象に、教育相談員・SSW研修会と兼ねて行い、具体的な事例を持ち寄り、生徒の関わり方や指導の在り方について意見交換を行った。一人ひとりに目が行き届くきめ細やかな指導の充実に向けて、今後も本研修会を大切にしていきたい。

(2) ICT推進拠点校の取組みと成果 (◎学校研究から ○授業づくりから)

【遊佐町立吹浦小学校】

「学ぶ楽しさを味わい豊かに考える子どもの育成」

- ◎「単元・題材の目指すゴールの姿」「学習課題」を明確にすることを授業づくりの視点として取り組んだ。
- ◎教科の「見方・考え方」を働かせて学ぶ楽しさを味わわせるために効果的なICTの活用を充実を図った。
- 今までの実践（ノートづくり、協働的な学び）も大切にしながら、タブレットを活用することで、学びの質が高まる授業づくりがなされていた。
- 授業後、子どもたち自らが板書を撮影し、学びの過程を振り返ったり、既習事項を提示したりする姿があり、学びのサイクルにつながっていた。



【鶴岡市立温海中学校】

「主体的に学び、自分の考えを表現できる、心豊かな生徒の育成」

～将来につながる深い学びを目指して～

- ◎生徒の主体性を引き出すために、「課題設定」と「振り返り」を授業改善の視点として取り組んだ。
- ◎生徒同士の学び合いを大切に、教科の学びの質が高まる協働的なグループワークの工夫を行った。
- 生徒が自分の端末を使い、自分なりの視点で演技を記録・保存することで、自分の技術の変化や進化を、より客観的に観察することができ、学びの実感につながった。
- 既習事項や既習資料がファイルに蓄積されており、試行錯誤する場面において、自在に活用でき、思考の深まりにつながった。



(3) 「学校研究ワンアップ研修会」

今年で3年目となった本研修会だが、今年度は1回のみ開催となった。内容を学習評価の在り方に絞り、事務所で作成した「学習評価リーフレット」を活用しながら、研修を行った。後半は、コロナ禍において、どのように学校研究を進めていくかという視点で情報交換を行った。

校外の研修会や授業研究会が中止になり、研修の機会が減った中で、校内で試行錯誤しながら、OJTの活性化と充実化が図られていることが話題になった。評価ミニ研修会、教科部会の充実、オンライン研修会等、確かな学力の育成に向けて、また、土台となる「担任力」アップに向けての、各学校の工夫した取り組みを、指導課通信を活用して発信した。



4 おわりに

本プランを生かした「探究型学習」の視点からの授業改善をより推進し、子どもたち一人ひとりの力を最大限に伸ばすために、学校として育成を目指す資質・能力を明確にし、学校全体として組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図っていく必要がある。

これからも、庄内管内の小・中学校、市町教育委員会と共に、力強く歩みを進めていきたい。

